

## クラゲの抱擁

### 望月苑巳

シンと更けてゆく胸の内に  
尖った男が住んでいたころのことだ。

部屋の掛け時計が止まっても  
失った人がいれば悲しみの針は止まらない。

夏のひまわり畑で、残酷な黄色が太陽と結婚する時間  
喉が渴いて水が欲しくなるほど、青い海原を泳ぎきったあと

クラゲのように抱擁し  
たっぷりと恍惚の水に溺れる  
それは時間の砂に埋もれた裸体の思想だ。

賑やかで派手なサーカスが、どこか淋しいのはなぜか知っていますか。サーカスのテント裏には、失敗したナイフ投げの名もない弟子や、滑り止めを忘れて落下したブランコ乗りのゴシック体が、紳士のように並んでいるのです。

尖った男が象の調教師で  
その昔象に恋したことがあったと、女は知っていた。  
振り返ってみれば  
人生はすべて借りと貸しからできているということだ。  
だから、女は割り切って男を愛したのに  
哀しみの時計が針を巻き戻すことはない。

夏の海にいて、なぜ、惨憺たる漆黒の闇を見るのですか。胸の内に深海の流れを見るのですか。あの手のぬくもり、殺気を閉じ込めた頬の陰影。男は嫉妬でほっこりと女の手を食べ始め、女は傲慢な拒絶で男の足を齧ったのです。

夕風はふたりを繭玉のように包み込み  
すなわち原子に帰っていった。

人間は欲望から成り立っているのだから  
クラゲの抱擁ほどいやらしく神聖なものはないのだ。